
同居人はキケンな兄弟！？

葵遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

同居人はキケンな兄弟！？

【Nコード】

N48580

【作者名】

葵遊

【あらすじ】

今年高校一年生になる白戸 優希は、両親が仕事の都合で海外に行くことになり、両親の親友という高城家で面倒を見てもらうことになった。

だが、突然、高城夫妻も海外へ単身赴任に行くことに！？

残された優希は、高城夫妻の息子たちと三人で暮らすことになったのだった。

1話 【仕事】

夜の八時。

いつもなら優希しか居なくて静かなはずのリビングに、なぜか今は、優希の母と父が困ったような笑顔を浮かべて優希を見ていた。

仕事忙しい優希の両親は、滅多に家に居ることがない。かといって、優希をほったらかしにしているわけでもなく、仕事休みの日には三人で出かけたりもしていたし、一週間も家をあけることはなかった。

——だが。

「……珍しく早く帰ってきたと思ったら、明後日あしたに向けての荷造りのため？」

「うん……」

「すまない……」

優希は、申し訳なさそうに謝る両親に怒鳴りたい気持ちをおさえながらも、なるべく優しい声で問う。

「荷造りは……まあ、なんとかなるとして。」

期間は？ 明後日からいつまで？

……それと、俺はどうしたらいいわけ？」

その言葉に母の肩がビクツと揺れ、父は目を泳がせる。数十秒待つが、二人はなかなか口を開かない。

ついに我慢の限界がきた優希は「俺、怒るよ？」と、ボソツと小さい声で言う。

すると——効果は抜群。今まで黙っていた二人が、急に口を開いた。

「すまないっ!!」

……帰ってくるの、三年後なんだ」

「その間、優希は私たちの親友のご家族にお世話になってね」

「……はあああっ!?!」

——俺、目の前で「てへっ」とか言ってる親たちに怒ってもいいかな。

*
*
*

……その日初めて、俺は本気で両親に激怒しました。

【登場人物紹介】

主な登場人物・簡単説明 （後に増えるかも知れません 軽いネタバレあり）

・白戸優希しらいちゆうき

……高校一年生。家事や料理が得意。両親の都合で稜りょう、理麻りまと同棲をすることになる。
黒髪、黒眼。真面目な性格で面倒見がよく、可愛いものが好きという乙女な一面も。
稜、理麻によると、「泣き顔がそそる」「笑顔超可愛い」とのこと。

平均身長よりも背が低いことが悩み。
稜と同じ男子高に通うこととなる。

・高城稜たかぎりょう

……高校二年生。幼いころに優希と会っている。家事や料理は殆ど出来ないが、運動が超得意。特にコレをしたいというものがないので部活には入っていない（助っ人はほぼ毎日頼まれる）。

茶髪でチャラく見えるが、元々の色なので仕方がない。明るく元気な性格で、優希にうるさいと言われることもしばしば。

優希のことが好き。

男子高に通っている。

・高城理麻たかぎりま

……中学三年生。料理はそれなりにできる。稜より少し明るめの茶髪で、超可愛い男の子。優希に可愛がられている。ただし、優希には猫を被っているという腹黒少年。

優希のことが好き。

身長は優希より低く、来年から一人と同じ男子高に通うことになる。

2話 【高城家】

——翌日。

優希は両親に連れられて、隣町にある“高城家”にきていた。

高城家は、住宅が並ぶ通りの真ん中辺りにあった。駅まで徒歩十分ほどなので、電車通学になると聞いていた優希にとっては、何かと都合のいい場所に建っている。……家がマンションだった優希にとって、高城家が一户建てというだけでも嬉しい限りだったのだが。

母——柚香^{ゆずか}がインターホンを押す。ピンポンという軽快な機械音がなった後、玄関の扉の向こうから「はい」という女性の声が聞こえてきた。

すぐに玄関の扉が開き、茶髪の女性が姿を現す。

「あつ、柚ちゃん^{ゆず}じゃない！ 待ってたよ、いらっしやい」
「急にごめんね、咲ちゃん^{さき}。おじゃまします」

茶髪の女性は雰囲気ふわふわとしていて、実年齢よりも若く見える。二人が同じ年とは到底思えない。もちろん優希は声にはださず、「おじゃまします」と言いながら家にあがる。

——なんか、自分の親がちゃん付けで呼んだり呼ばれたりしてるのって変な感じ……。

* * *

リビングに案内され、ソファアに座って出された紅茶を飲む。紅

茶に詳しくない優希だったが、なんとなくこの紅茶の値段が高いことは、香りと味でわかった。

——これ美味しいな。今まで興味なかったけど、紅茶、今度自分で淹れてみようかな……。

そんなことを思っていると、リビングの扉が開いた。

「待たせちゃってごめんなさい。今日旦那は仕事でいないのだけど、今子供たちを呼んできたから、もう少しだけ待ってもらえる？」
入ってきたのは咲だった。

空いていた一人用のソファーに腰掛けた咲に、柚香が話しかける。
「そういえば……、稜君が高二で理麻君が中三だっけ？ 大きくなつたわよね」

「そうねえ……。優希君、今年から稜と同じ高校でしょ？ 襲われたりしないか心配で心配で……」

「っ……！？」

母親たちの会話に、自分の名前と聞き慣れない単語を聞いてしまい、驚いて二人の方を見る。

そんな優希を気にも留めず、二人の会話はどんどんヒートアップしていく。

「もし優希君が襲われて、写真撮られて、脅されたら……！」

「それが稜君の親衛隊だったら……！？」 『これ以上稜様に関わつたら、これ、ばらまくから』とか言われちゃって……！」

「そこに稜がきて、『——優希っ……！』『ごめん……。……。俺、お前以外のやつに……。！』とか言っ」

恥ずかしくなり俯く優希。すると突然、会話が聞こえなくなった。

——誰かに耳をふさがれた、そうわかったときにはもう、その手は離されていた。

「いい加減にしろよ、母さん」

「そうだよ。えーっと、優希……お兄ちゃん？ 顔真っ赤になってるじゃんか」

上から、男らしい——べつに野太いわけじゃない——声と、まだ変声期をむかえていないような男の子の声が聞こえる。

——この二人が、俺がこれから居候することになる高城家の子供……。

優希は恐る恐る顔を上げる。

するとそこには、茶髪の髪をした兄弟が、優希を見下ろして微笑んでいた。

「久しぶり、優希」

「はじめまして、優希お兄ちゃん」

【高城家 2】

「だ……、誰？」

「え、覚えてないの……？」

残念そうな顔をしながら呟く目の前の人を見て、優希は頑張っているように思えるが、まったくといっていいほど記憶に残っていない。

「えっと……、ごめんなさい」

「いや、謝らなくていいって。だいぶ昔だから仕方ないし……」

覚えてないなんて失礼すぎる。そう思って謝ったのだが、目の前の男性はあまり気にしていない様だった。

「優希君」

「は、はいっ」

咲が話をやめて、優希に話しかける。

「そっちの背の高い方が優希君のひとつ上で、^{りょう}稜。背の低い方が優希君のひとつ下で、理麻ね」

「稜さんと理麻君……」

名前を覚えるように呟く優希に、「ちょ、ちょっと待った！」と稜が苦笑しながら言う。

「稜さんはやめてくれ……。呼び捨てでいいから！」

「僕も理麻でいいよ」

「じゃあ……、稜と理麻……？」

耐えられないというように必死に言う稜に押され、二人を見上げて首をかしげながら言う、稜と理麻は急に腕で顔を覆ってしまった。

「へ……？ な、何？」

戸惑いながら咲を見ると、咲はニヤニヤとした笑みを浮かべながら口を開いた。

「もぉ〜……。優希君、攻撃力高すぎっ！」

「攻撃力……？」

「鈍感なところも可愛い……」。

まあ、とりあえず……こんな息子たちだけど、いろんな意味でよろしくね」

「あ、はい……」

いろんな意味がいまいち理解できなかったが、とりあえず頷いて返事をした。

と、その時。

柚香がソファーから立ち上がった。

「荷造りもあるし、そろそろ帰る？」

「あー……、うん」

その言葉に、部屋にかけられていた時計に目をやると、五時をまわっていたことに気付く。

玄関の外まで見送りにきてくれた咲たちにもう一度礼を言い、優希たちは家へと帰っていった。

「……優希お兄ちゃん、可愛かったね」

「ああ。……って、お前、猫かぶりすぎ」

「あら、別にいいと思うわよ？ ……腹黒少年攻め、天然真面目受けも萌えるもの！！」

「稜だったら……、隠れ鬼畜攻めかしら」

「俺は鬼畜じゃねえ！！」

「……嘘だ」

——後ろでこんな会話が行われていたとも知らずに……。

3話 【同居】

「咲ちゃんたちによろしくね、……病気にはくれぐも気を付けるように。あと……」

「もういいって。子供じゃないんだし……」

「そう？　じゃあ行つてきまーっす！」

元気よく手を振って空港に行くために駅に向かう両親。少し寂しい気持ちを隠しながら、優希は手を振り返した。

「ちゃんと、週に一回くらいは連絡するのよ！　萌えの提供も忘れないでねー！！」

「んなこと、大声で言うな！」

萌なんかあるわけないだろ……、と思いながらも、両親の姿が見えなくなったところで家の中へと入る。

昨日、宅急便で荷物を送っておいたせいか、家の中が広く感じる。だがそのおかげで、持っていく荷物は携帯や財布などの小物だけだ。すんだ。

「そろそろ行かないとな……」

携帯で時間を確認しながら呟く。この先の生活を少し不安に思いながら、優希は荷物を持って高城家へと向かった。

* * *

インターホンを鳴らす。すると、咲が昨日と同じまぶしいくらいの笑顔で迎えてくれた。

「いらっしやい、優希くん！　さ、入って入って」

「お、おじゃまします」

靴を脱ぎ、咲に背中を押されるがままにリビングの扉を開ける。

すると中には、陵と理麻とその父親らしき人物がソファソファーの上に座っていた。

「昨日は居なかったけど、その人が私の夫の孝たかしさん」

ソファソファーに座っている男性を見る。背が高く、がっしりとした体格には少し似合わず、おおらかそうな顔立ちだ。この二人が親なら、陵と理麻がこんなにかっこいい顔立ちと可愛い顔立ちをしているのにも納得できる。

「白戸優希です。よろしく願います」

「こちらこそよろしく頼むよ」

孝の笑顔に優希の緊張がほぐれ、優希も笑顔を見せた。

「歓迎会みたいなものもしたかったんだけど、私たち今から仕事に行かなくちゃならなくて……」

「あつ、いえ、そんなことまでしてもらわなくても……」

でも……、という咲の言葉を遮り、咲の携帯が鳴った。

「……ちよつとごめんなさい」

頭を下げ、リビングの端に行って電話をとる。

話しているうちに険しくなる咲の顔に、陵と理麻がひそひそと小さい声で話す。

「なにかあったのかな？」

「またいつものトラブルとかじゃねえの？」

「そうかなあ……」

陵と理麻の会話が終わるとともに、話し終わった咲が泣きそうな顔をして戻ってきた。

「どうしようっ……」

「どうしたんだ、咲？」

あわてる咲に、孝が落ち着かせるように咲の肩に優しく手を置く。
その言葉に、咲は深呼吸をしてから口を開いた。

「私たちも、海外行くことになっちゃったの……!!」

【同居 2】

咲の言葉に優希、稜、理麻の三人は固まる。

「海外か……」

呟く孝に、はっとしたように稜は顔を上げた。

「俺たちはどうしたらいいんだよ。……三人で暮らすのか？」

ちらつと優希を見たあと、何か話している咲と孝に目を向ける。すると、咲が「それよ！」と言いながら手を打った。

「三人で暮らしたら問題ないじゃない。もしかしたら、カップルができるかも知れないし……」

「カツ……プル……？」

嬉しそうな顔を浮かべながら提案する咲に、首を傾げながら優希が呟いた。

「そこは気にしないでいいが、確かに三人で暮らせば問題はないか」

「俺さんせー」

「僕も僕もー！」

にこにこ笑顔を浮かべて賛成する三人だったが、ぴたっとその動きが止まり、優希を除いた四人で顔を見合わせる。

「……俺、家事なんかできねえけど」

「僕もちよつとしか……」

苦笑いを浮かべる稜と理麻に、「はあ……」と溜め息を吐く咲と孝。

その様子に、今まで黙って会話を聞いていた優希が「あの……」と、おずおずと口を開いた。

「俺、家事ならひととおりは……、一応、できますけど……」
四人の視線が自分に向き、だんだんと語尾が弱くなっていく。

「……………」

「あ、えつと……、その……」

自分に視線を向けながら誰も言葉を発しなくなり、なにかまずいことを言っただろうかと、不安が募り始める。

——と、そのとき。ぎゅつと誰かに抱きつかれた。

「すごいね、優希お兄ちゃん！ 顔も可愛くて性格もいいし、おまけに家事もできちゃうなんて……」

少しだけ視線を下に下げると、そこには、尊敬の眼差しと満面の笑みを浮かべた理麻がいて、抱きついてきた相手が理麻だとわかる。

「そんなことないって……」

「ううん、そんなことあるっ。……優希お兄ちゃん、僕のお嫁さんになってよ」

「お、お嫁さつ……！？」

本気とも冗談ともとれる笑顔を向ける理麻に、優希は顔を真っ赤にして言葉をつまらせた。あたふたと慌てる優希を楽しげに見る理麻。

そんな二人を面白くなさそうに見る稜に、咲は「三角関係かしら？」と呟きながら、妄想を始めようとする。

——数十秒後。

四人のこの説明難い空気をやぶったのは、こほん、という孝の咳払いだった。

【同居 3】

* * *

「それじゃあ……、家事は優希君にまかせてもいいかしら」

調理器具の使い方や掃除道具の場所をおおまかに教えてもらい、最終確認とでもいうように聞く咲に、優希は笑顔で「はい」と答える。

「理麻も手伝えらと思うし、稜も——家事は無理だけど、力仕事とかだったら遠慮無く使ってやって」

につこりと笑う咲に苦笑いを浮かべながらも小さく頷くと、「遠慮無くってなんだよ」と、稜の文句を言う声が聞こえた。

「わからないことがあったら稜や理麻に聞いたらいいし……。教えることはこれくらいかしら」

「あ……、咲さん。俺の荷物っていつ届くかわかりますか？」

頬に手を添えながら考える咲に、思い出したように聞く優希。

「多分、今日の晩には届くと思うわ」

「そうですか……。ありがとうございます」

丁寧に頭を下げる優希に、咲は不満いっぱいの顔を向ける。

「違っつ！」

「……え？」

「もっと普通に話してほしいの！」

いきなり肩を掴まれて揺すられ困惑する優希。そんな優希を見かねた稜が咲の手を離しながら、呆れたように溜め息を吐いた。

「母さん……」

「何よ、陵」

「何よじゃねえよ。普通、昨日会ったばかりのやつに、そんな風に話しかけると思ってたのか？」

陵が正論を述べれば、咲はぐっと押し黙る。

「だって……」

「だってじゃねえよ」

有無を言わせぬ口調で言う咲は俯いてしまう。すぐに顔を上げたが、その目はうつすらと涙目になっていた。

「じゃあせめて、『ありがとうございます』じゃなくて『ありがとう』にしてほしいの……」

「え、えつと……ありがとう……」

今にも泣き出しそうな咲に、優希は言いくそうにしながらも小さな声ではつきりと言う。

「どういたしまして！ それじゃあ私たち、今日の夜に出なきゃいけないから、荷造りしてくるねー」

すると、さっきまでの悲しそうな顔が嘘のように笑顔になり、すまなさそうな顔をして優希を見ていた孝を連れて、二階へと上がって行ってしまった。

「こんな親で悪いな……」

呆然としている優希の肩に手を置き、同情するような視線が陵から向けられる。

「優希お兄ちゃん、僕には普通に話してね」

優希が口を開こうとする前に、横から理麻に話しかけられた。

「俺も。……これから一緒に暮らすつてのに、毎日敬語はきついからな」

それに同意するように陵も言う。

「わかり——、……わかった」

つい敬語を言ってしまうようになった優希に、陵がクスツと笑い

ながら顔を近づけてくる。

「今、『わかりました』って言いかけただろ？」

「ち、ちが——……んっ」

違うという前に、口を陵のそれで塞がれる。

「な、何して……！」

「ん？ 罰ゲーム。次から、敬語使ったらキス一回な」

触れるだけのキスだったが、驚きと恥ずかしさで顔を真っ赤にする優希を見て、陵は楽しそうに目を細めて笑った。

「ずるい……。僕もしたい！」

「お前は駄目だ」

「駄目に決まってるだろ……っ」

——初めてだったのに……！！

そんなことを思いながら、目の前で「キスしたい」だの「駄目」だのと言ひ合っている二人を、優希は軽く睨むように見ていた。

【同居 4】

* * *

その日の晩。荷造りを終えた咲と孝は、本当に海外へと行ってしまった。

見送りをすませた優希、稜、理麻の三人は、これからどうするかを話し合う為にリビングに集まっていた。

「えーっと、とりあえず母さんが渡してくれたメモを読むから、よく聞いてくれ。」

『稜、理麻、優希君へ。』

急に海外へ行くことになってしまつてごめんなさい。きっと、帰つてこれるのが三年ほど後になってしまうと思います。

卒業式や入学式、受験にも一緒にいてあげられなくて、きっと大変なことや面倒なことたくさんあると思うけれど、三人で協力して頑張つてほしいと思っています。

お金のことは柚ちゃんとか相談してなんとかするので、心配しなくて大丈夫よ。（なるべく節約して、無駄遣いはしないように！）

冷蔵庫に残っているものは勝手に食べてもいいからね。

何か困ったことがあれば、電話かメールしてね。……やっぱり、寂しいので週に一回は電話かメールして下さい。

お母さん&お父さんより』

……だつてさ」

読み終わり、稜が持っていた紙を折りたたんでテーブルに置く。

はぁ、と溜め息を吐いた後、「じゃあ、明日からどうするか決めるか？」と足を組みながら問いかけた。

「どうするって、具体的になにを？」

「そうだなあ……。……買い物当番とか？」

——買い物当番か……。行ってもいいんだけど、この辺りの道知らないからなあ……。

「あのさ……。俺行ってもいいけど……」

「だめだ。優希、この辺の道知らないだろ？」

おずおずと言ってみた提案は即答で却下された。「それはそうだけど……。」と優希が一言もらしたとき、「あ、そうだ！」と言いなから理麻がソファアールから立ち上がる。

「買い物なら、僕が着いていったらいいじゃん！」

目を輝かせる理麻に、「無理だろ」と言っても稜は理麻を座らせる。「なんで！」

「お前、副会長だろ？生徒会急がしいのに、買い物に毎日着いて行くとか無理無理」

苦笑しながら言う稜に、理麻は軽く稜を睨みつける。

「そりゃあそうだけだよ……。じゃあどうするの？兄ちゃんだって委員会入るんでしょ？無理じゃなか！」

「だから今考えてんだろ！」

だんだん語尾が強くなっていく二人。そんな二人に、優希は心配そうに二人を見守ることしかできない。

——自慢ではないが、優希は生まれてから一度も《喧嘩》というものに遭遇したことがない。

両親は仲が良く夫婦喧嘩なんていうものを見たことはないし、小学校や中学校でも喧嘩を見たことがない。勿論、自分がしたことも優希は幼い頃からそれはそれはもう無邪気で可愛げのある子供だ

った。だれにでも優しく親切に接する優希は人に嫌われることが滅多に無い。そのおかげで自分が喧嘩に巻き込まれることはなかった。見たことがないのは、周りの人達が見せないようにしていたからだ。常に二人以上の友達にかこまれ、喧嘩を見つけると何かと理由をつけて違う道に行き——そうやって今まで、純粹無垢に育ってきた。

そんな優希が喧嘩に遭遇したらどうなるか？ …… 答えは簡単。

「……………」

優希の小さな声が聞こえてきて、殴り合いになりそうな雰囲気。二人は一度喧嘩を中断して優希の方に視線を向ける。

「ゆ、優希!？」

「どうしたの!？」

——二人の視線の先には、今にも零れ落ちんばかりの涙を目に溜めている優希がいた。

【同居 5】

「あ……、ごめっ……」

服の袖で涙を拭こうとしたが、稜によって止められる。

「優希？ 何で優希が泣いてるんだ？」

なるべく刺激しないよう子供をあやすように頭を撫でながら優しく聞くと、涙目のままボソボソと呟く優希。

「ん？」

「……こんな状況だったの初めてで……っ、急になんか、出てきちゃって……っ」

泣き顔を見られるのが恥ずかしいのか腕で顔を隠しながら言うと、撫でていた手の動きが止まる。

「……？」

顔を上げると、真っ赤に染まった稜の顔があった。

「どうしたの？ 兄ちゃ——」

急に固まった稜を不審に思っ、て近付いてきた理麻も、同じように固まってしまった。

「……二人とも、どうしたんだ？」

「……あ、いや……。なんでもない……」

「……もう喧嘩しないから、……そろそろ寝よっか、優希お兄ちゃん」

「あ、うん……」

喧嘩が収まったのはよかったのだが、何となく話のはぐらかされたよう……。なんて事を思いながら頷く。

「じゃあ、僕達もう寝るから。おやすみ兄ちゃん」

にこっと笑い、優希の手を引いてリビングを出ようとする理麻。

「おい、理麻！」

「何？ 兄ちゃん」

「お前まさか……、優希と一緒に寝るつもりじゃないだろうな？」

「何言ってるの？ 当たり前じゃん」

稜は軽く睨みながら言うが、理麻はさも当たり前のように言うてのける。

すると稜は優希の腕を引っ張り自分の方へと寄せる。稜より身長が低い優希は、自然と稜の腕の中に納まる形に。

また二人が言い合いを始めようとしているが、優希は今それどころではなかった。

——おかしい。なんで俺、こんなに顔熱くなってるんだ？

優希は、自分の顔に熱が集まっている事に気付いた。自分の頬に手を当てると少し熱い。

（何か変な物食べたっけ……？）

まったくその原因がわからないまま、結局優希はリビングのソファで寝ることになったのだった。

4話 【春休み】

翌朝。リビングのカーテンの隙間から僅かに漏れる光に、優希は眩しそうに眉を寄せた。

「んー……。……。あ」

身体を起こし伸びをすると、身体にかけてあった掛け布団が下に落ちる。

掛け布団を拾って顔を上げると、見慣れない風景に首を傾げた。

「そつえばここ、俺の家じゃなかったんだっけ……」

昨日からいろいろあつて頭がついていかない。掛け布団を手に持ったまま数秒の間考え、やっとここが親の親友——高城家のリビングのソファーだということを思い出した。

「まだ八時か……」

壁に掛けてある時計で時間を確認し、ふとテーブルの上に置いてある自分の携帯に目をやると、チカチカと青い光が点滅している。どうやらメールがきていたようだ。

まだ少し寝惚けたまま携帯に手を伸ばして画面を開き、軽く操作をしてメールを読む。

『優希へ。』

咲ちゃんに聞いたんだけど、三人で暮らすことになっちゃったそうね。ごめんなさい。

急に綾君や理麻君と暮らすことになって戸惑ったりしてるかもしれないけど、二人ともすごくいい子だから仲良くしてね。

話変わるけど、……。どうだった？

やっぱり三人で仲良く寝たりしたの！？寝る前に体触られたりとかは！？

一人で寝るとしたらやっぱりソファーよね。もしこのメールを読んだときにまだ二人が起きてなかったら、朝ご飯作ってどっちか起こしに行きなさい！

私の予想だと寝惚けてキスされるか、腕引つ張られてベッドの中に入れられて、抱き枕感覚でぎゅってされると思うからっ！

……あ、何か萌えるイベントがあれば何でもいいから報告してね。

それじゃあ、いい報告待ってます！』

「——……誰が報告するか……っ」

読み終わり無意識に呟いた優希の顔は、耳まで真っ赤に染まっていた。

………

「……でも、朝ご飯は作らないとな。何にしよう……」

ようやく顔の赤みが引いた頃、優希は冷蔵庫の前で腕を組んで立っていた。朝食のメニューを考えているのか、その口からは時折パンやご飯などの呟きが漏れる。

「……よし、洋食にしようっ」

ちらつと食パンを見て決める優希。

卵やフライパンを手に取りてきばきと素早く朝食を作っていく。

その手つきは慣れたもので、皿に綺麗に盛り付けあっという間に三人分の朝食が出来上がった。

【春休み 2】

「やっぱり……、起こしに行かないと駄目だよな……」

目の前に並ぶ朝食を眺めながら呟いたと同時に、頭の中にさっきのメールの文字が浮かぶ。

「……いや、あんなことありえない……よな」

無理矢理自分に納得させるようにうんうんと頷き、リビングを出て二人の部屋がある二階へと向かった。

コンコンと、先に階段から近い稜の部屋の扉をノックする。

「まだ寝てる……？」

まだ寝ているのか、何の物音もしない。もう一度強くノックをしても結果は同じだった。

「稜？ 入るよ？」

扉をゆっくり開けて部屋の中に入ると、カーテンは開いておらず、ベッドが少し膨らんでいる。

起きててくれていたらよかったのにと、心の中だけで小さく溜め息を吐いた。

ベッドにゆっくりと近付く。掛け布団を少しだけめくると、規則正しい寝息をたてている稜の顔があった。

（うわ……、寝てるときもかっこいいとか……）

「おい……。朝だぞー」

「ん……」

羨ましいと思いながら、稜の肩を揺すって声をかける。

だが、軽く身じろぎしただけで起きる気配が無い。

「朝ご飯冷めるぞー」

「んー……？」

さつきより強めに揺ると、微かに稜の目が開いた。

「あ、起きた？ 朝ご飯できたから……」

「黙って……」

一階に下りてきて、と続けようとするが、稜の言葉に遮られてしまふ。

そして、もう一度目を閉じた稜に、優希はもう一度起こす為に声を掛けようとするが。

「いい加減に起き……んんっ！？」

後頭部をいきなりぐつと押され、そのまま唇をふさがれる。

——これって、キス……！？

突然のことに驚いていると、一瞬、唇が離される。その隙に抗議をしようと口を開くが——それがいけなかった。

「何して……っ、んう、ふ……あっ」

開いた隙間から、何か生暖かいものが入り込む。

口腔を自由に動きまわるそれに、わけがわからなくて思考が一旦停止する。

「は……っん、な……これ……っ」

途切れ途切れに言葉を漏らしながら抵抗すると、それに気付いた稜が唇を離した。

「何って、キスだけど？」

「し、舌……！」

初めてのディープキスで、羞恥からか涙目になっている優希を見て、稜は小さく笑ってから楽しげな声色で告げる。

「あれぐらいでそんな顔真っ赤にしてさあ……。そんなんじゃ、この先なんかできねえんじゃねえの？」

「先……？」

真っ赤になった顔を腕で隠しながら聞くと、稜はニヤリと笑い、優希の頬に手を添えた。

「そんなことも知らねえの？ 先ってのはなあ……」

思わず、稜の顔に見入ってしまった。それほど、今の稜の笑みは何かひきつけるようなものがあつた。

だが、さすがにその『先』の内容を聞くのは気が引ける。というか、それを聞いてしまつては、これから稜とまともに顔を合わせる事ができなくなりそうだ。

「……ヤ」

「もういいっ！」

稜が『先』を言う前に、優希は稜の手を振り払って掛け布団を稜の顔へと押し付ける。

稜のくぐもつた声が聞こえたが、気にしない。

「バカ……っ」

そう一言吐き捨て、そのまま急いで部屋を出て理麻の部屋へと駆け込んだ。

【春休み 3】

「はぁ……」

理麻の部屋に駆け込み、そのままずると扉にもたれかかりながら座り込む。

静まり返っている部屋には、理麻の寝息だけが優希の耳に入ってくる。

だが、いつまでも座り込んでいるわけにもいかない。もう一度軽く溜め息を吐いてゆっくりと立ち上がった。

ベッドに近づいて掛け布団を捲ると、予想通りの穏やかな寝顔があった。

「起きて……」

さっきのこともあったので、一歩下がったところから肩を揺する。

「ん……？ 優希、お兄ちゃん……？」

眠たそうに目を擦っているが、すんなりと起きてくれたことにはほっと胸を撫でおろした。

「あ……、朝ご飯できたから、呼びに来ただけ……」

「……」

「理麻？」

顔をこっちに向けたまま理麻が無言で固まる。心なしか、少し顔が引きつっているようにも見える。

「……理」

「先に兄ちゃん起こしに行ったの？」

「え？ あ、うん」

急に固まった理麻を心配して一歩近づいた瞬間——ぐいっと腕を引かれた。

（……あれ？ さっきもこんなこと……）

状況を飲み込めずに呆然としていると、いつの間にかベッドの中に引きずり込まれていて、理麻の上に跨っていた。

慌てて下りようとするが、理麻の言葉で、優希の体がピタリと固まる。

「お兄ちゃんに、変なことされなかった？」

「……っ」

さっきのキスを思い出し、だんだん顔に熱が集まってくる。

「……あの糞兄貴……」

顔の熱を冷まそうと必死になっている優希には、理麻がボソッと呟いたことに気付かなかった。

忘れようと頭をブンブンと振る優希。

「べ、べつにあれば……寝惚けてただけだし、わ、忘れるんだっ。

忘れ——ひゃっ!？」

いきなり、パジャマ代わりにしていたジャージの中に、理麻の手が差し込まれた。

「な、何……っ、冷た……」

直に肌に触れ、少し冷えた手はつつ……、と優希の脇腹を滑る。

「兄ちゃんにも、こんなことされた？」

「されて、ない……っ」

そう言えば、理麻は「そっか」と呟いて手を中から出す。

やっと解放されたと安心して気を緩めたその時。

「……え？」

視界が、反転した。

【春休み 4】

さつきとは逆。優希が下で、優希の上に理麻が跨っている。

「な、にして……」

腕に力を入れて理麻を退かそうとするが、びくともしない。

この状況はちょっと危険なんじゃないかと優希が思い始めたとき、また、理麻の手が優希に近づく。

「っ……」

びくつと身を強張^{こわば}らせ、堅く目を瞑る。すると、理麻の手は優希の頬を優しく撫でた。

「そんなに怖がらなくても、今は何もしないよ」

「……………」

優希の上から退く理麻の顔は少し悲しそうで、優希は思わず理麻の手を掴んだ。

「優希……、お兄ちゃん？」

「……怖かったわけじゃない。いきなりだったから、ちょっと驚いただけだから」

これは本心だ。

わかってもらうために、優希は目を逸らさず、理麻を見つめる。

「……ありがとう。ごめんね」

嬉しそくに笑って、理麻は起き上がったばかりの優希に抱きついた。

「……ところでさ。何でさつき、『変なことされた？』って聞いたんだ？」

理麻の頭を撫でながら、ふと思い出したことを聞くと、理麻は笑顔を僅かに引きつらせる。

「ああ……あれは……」

少し言いにくそうに話し出す理麻に耳を傾けるが、「あはは……」と乾いた声をもらすことしかできない。

理麻の話を纏めると、寝起きの稜は目の前の人に手を出す癖があるのだとか。さすがに両親にはしないらしいが、今のところ、理麻と友人数人が被害にあっているらしい。

「ちなみに……、ど、どんなことされたんだ？」

理麻や友人にも、あんなキスをして、あんな言葉を掛けたのだからうか。

何でそんなことを気にしているんだと自分で不思議に思いながらも、いつの間にか口から言葉が出ていた。

「……優希お兄ちゃん。何か変なこと考えてない？」

「い、いやっ。別に……」

「ま、いいけど……。手え出すって言っても、ほんとに手を伸ばすだけだよ。せいぜい腕を引くぐらい」

呆れたような溜め息を吐く理麻に、小さな疑問が生まれる。

「それだけなら、別に『変なこと』にならないんじゃない？」

「それは相手が僕達だからっ。……優希お兄ちゃんだったら襲いかねないよ、あの糞あ——兄ちゃんは」

「ま、まさかそんなこと……っ」

苦笑いを浮かべながらそんなことはないと思いつつも、先ほどのことを思い出して言葉につまる。

——大丈夫だよな……。寝惚けてただけだろうし……。

言葉につまる優希をじろつと理麻が見たが、朝ご飯が出来ているからと、優希は無理矢理話を終わらせてリビングへと下りていった。勿論、稜にも伝えてくれと頼んでから……。

【春休み 5】

「いただきます」

「いただきますーっす」

「いただきますっ」

三人ともほんの少しだけ違う食事の挨拶をし、朝食に手をつけ始める。

「ん、これうまい！」

稜が絶賛するのはミニオムレツ。満面の笑みでオムレツを口に運びながら、サラダにかけるドレッシングを選んでいる。

「優希お兄ちゃんすごいよっ。ドレッシングも作れるんだねっ」

「ドレッシングぐらいだったらすぐに作れるっ。それより、口に合えばいいんだけど……」

興奮気味に言う理麻は、優希特製シソ風味の和風ドレッシングをサラダにかけていた。

今日の朝食は、食パンとミニオムレツ、サラダの三品だ。

更に、サラダ用として、高城家愛用のごまドレッシングと優希が持ってきた自作の和風ドレッシングをテーブルの上に置いてある。

「優希って、料理すげー上手いな」

「……まあ、料理だけは頑張ったからちよっとは自信あるけど」

苦笑いを浮かべる優希に、理麻がサラダを食べる手をとめて尋ねる。

「それって、おばさんとおじさんがあんまり家にいないから？」

「それもあるけど……」

「けど？」

「母さんに、『お嫁に行くのに料理ぐらい出来なくてどうするの！』って鍛えられたから。男の俺が嫁ぐわけないって言ったけど聞かなくてさ……」

「ぶっ……！」

優希が言い終えると同時に、稜が飲んでいた牛乳でむせた。慌てて優希が席を立ち、稜の隣に行って背中を擦る。

「急にどうしたんだよ……、大丈夫……？」

「あ、ああ……。別に何でもないから……」

稜は優希の『お嫁に行く』発言にむせたのだが、優希にそれがわかるはずもなく、ただ心配そうに背中を擦り続けた。

理麻はというと……、目があった稜に「バカじゃないの？」と、口パクでバカにしていた。

* * *

稜が突然むせるというハプニングもありながら、朝食を食べ終わった三人は、仲良く並んでソファに座っていた。

「……何で俺が真ん中なんだ？」

真ん中に優希。その右に稜、左に理麻という配置で。

「何で俺がこいつの隣に座らないといけないんだよ」
理麻

「それは僕のセリフですー」

慣れつつあるこの二人の言い合いに、優希はぼーっとテーブルを見つめる。

何か理由があるわけではなく、目線を落とすとそこにテーブルがあったからだ。

「んだとてめえ……。もう一回言ってみろ」

「はぁ？ 糞兄貴に糞兄貴って言って、何が悪いの？」

二人の言い合いも今朝から何度聞いただろう。理麻の口の悪さもだいたいわかった。

次第に、うとうととしてくる。言い合いも途切れ途切れにしか頭に入ってこない。

普段なら眠くならないこの時間。気疲れと、この暖かい雰囲気のせいだろうか。

（家では、こんなに賑やかだったことなかったかも……）

そう思ったのを最後に、優希は眠りについた。

【春休み 6】

「ったく……。何でこんなに糞生意気な弟に育つかない……」

「さあー。何ででしょうねー」

口喧嘩を始めて数十分。いい加減疲れてきた二人。

稜がソファーに背を預けたと同時に、稜の肩に重みが。

「……？ ああ、優希か——つて、え？」

首だけを動かして横を見ると、こてんと稜の肩に頭を乗せてすやすやと眠る優希がいた。

「え、あ、うえ……。ゆ、き……。っ？」

「………何たるヘタレっぷり……。——Sなのは、寝起きだけか……」

動揺して赤くなっている稜を見て、呆れたように溜め息を吐く理麻。もちろん、慌てている稜には聞こえていない。

「兄ちゃんだけ、ずるい」

「そんなこと言われてもな……」

落ち着いた稜は、理麻と小声で話しながら、二人で優希の寝顔をじつと見ていた。

見ようによつては、可愛いとも綺麗ともかつこいいとも見れるその整った容姿。

いつもはきちつとしていてスキがないように見えるが（実はスキだらけ）、寝顔は、子供のように幼く見える。

「可愛い……」

理麻が呟きながら、寝顔をもっとよく見ようと優希の前に移動する。

……と同時に。

「んー……う……」

優希が軽く身じろぎして、うつすらと目を開けた。

「あ、起きた？」

「起きたのか？」

二人が声をかけるが、反応がない。

「うー……ちゃ……」

「え？ 優希お兄ちゃ——！？」

それどころか、何かをボソツと呟いて、……目の前の理麻を抱きしめた。

「優希？」

「ど、どうしたの？ ……いや、僕的には嬉しいんだけど」

「………うー、ちゃん……？」

「は！？」

突然聞こえた名前。

耳元ではっきりと聞こえた理麻は、思わず大きな声を上げてしまった。

「どうしたんだ、理麻？」

「い、今……」

ゆっくり離れようとすれば、さっきよりも優希の腕に力が加わる。まるで、離したくないとでもいうように。

「優希お兄ちゃんいい匂いする……」

「……お前、何か今の台詞変態じみてたぞ」

「うつさい、黙ってる糞兄貴」

【春休み 7】

少しすると、意識がはつきりしてきたのか、優希の目がだんだんと開き――、

「うわっ!？」

ぱちつと目が開くのと同時に、腕の中にいた理麻を解放した。

「優希お兄ちゃん、『うわっ』はちょっと傷つく……」
「あ……、ごめん」

目を擦りながら謝るが、それ以上理麻は何も言わず、無言で優希の肩を掴む。

「おい、理麻。そんなに怒らなくても――」

「うーちゃんって誰？」
「っ!！」

理麻の言葉で、優希の体が固まる。

俯いた優希に理麻はもう一度^き訊き、稜は何がなんだかわからなくて、優希と理麻を交互に見ていた。

「うーちゃん？ 理麻、どういうことだ？」

「さっき、優希お兄ちゃんが寝言で言ったの」

じつと優希を見つめながら、理麻が簡単に説明すると、稜の目の色が変わった。

「……誰なんだ？」

「は？」

「だから、うーちゃんって誰なんだよ」

「……言えない」

綾が訊くと、『うーちゃん』を思い浮かべたのか、優希の頬が僅かに朱に染まる。

それを見えますます不機嫌になる理麻。

「彼氏……じゃないよね、まさか」

「彼氏！？ そんなわけないだろ。……大体、なんで彼女じゃなくて彼氏なんだよ」

理麻の呟きに、優希は驚いたように声を上げた後、呆れたようにソファーにもたれかかった。

綾は、安心したように溜息を吐く理麻をちらりと見て、再び優希に同じ質問をする。

——寝言で自分とは違う名前を呼んだ。そんな些細なことですえ嫉妬してしまうほどに、幼い頃に抱いた淡い恋心は成長していた。

その事実にも、綾は誰にも気付かれないように自嘲めいた笑みを浮かべる。

「絶対、笑われる」

「笑わない」

「……笑う」

「笑わないって」

「…………」

同じやりとりを繰り返し、諦めない綾と理麻に、ついに優希が折れた。「ちよつと待ってて」と言い残し、優希はリビングを出て二階へと向かう。

二階には綾と理麻の部屋、それと、優希の部屋がある。優希の部屋と言っても、まだ荷物の整理をしていないから山積みのダンボールしかないのだが。

優希が二階に向かったということは、『うーちゃん』は二階にいる。……と、そこで、何かおかしいことに二人は気付いた。

「うーちゃんつてもしかして、人じゃない？」

「……その可能性が高いな」

人じゃないかもしれないということに、稜も安堵の息を吐く。が、油断してはいけない。

「……お待たせ」

優希はすぐに戻ってきた。……腕に、大きなうさぎのぬいぐるみを抱いて。

「これがうーちゃんなの？」

こくりと、小さく優希が頷く。

稜も理麻もさすがに驚きを隠せない。自分たちが嫉妬したのが、ぬいぐるみだったのだから。

胸の中にあつた嫉妬という黒い感情が消えて、かわりに、愛しいという感情が二人の胸に生まれる。

優希がぬいぐるみを抱いている。——サイズはかなり大きく、理麻より少し小さいくらい。の全長は最早抱き枕と呼んでいいほどだが、見せることが嫌なのか少しむすつとして、ぬいぐるみを抱く腕に力をこめる優希を可愛いと思いつつながらジッと眺める稜と理麻。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858o/>

同居人はキケンな兄弟！？

2011年4月24日03時56分発行